

## はじめに

2019年度から高大接続研究センター長になりました柴田好章です。本センターは、全国の類似の名称のセンターの中でも、大学の入学者選抜に直接に関与しない純粋な研究センターとして、特色を有しています。このセンターは、2015-2018年度の概算要求による運営・設置を経て、2019年から基幹経費による運営になりました。設置当初からセンター長を務めてこられ、センターの基幹経費化にも貢献された大谷尚教授は、2018年度をもって本研究科を定年退職されましたが、2019年度から、特任教授としてあらためてセンターの業務を担ってくれることになったことは、本研究科とセンターにとって、大変喜ばしいことと考えます。

さて、高大接続改革は、大学入学共通テストにおける、英語民間試験と国語・数学の記述式問題の実施があいついで見送られたことによって、混迷の様相を呈しています。このような状況にあって求められるのは、高大接続にとって本来何が必要なのかについての研究的な知見であると思います。たとえば高大接続型学力とはどういうもので、高校卒業までの期間にそれはどのような条件で育成され、大学ではそれがどのように発揮されるのか。このことについての研究はほとんどなされていません。だからこそ、当センターに求められるもののひとつは、そのような知見の獲得ではないかと考えています。そのために当センターは、学内外のさまざまな人々や機関と連携して活動を発展させて行く必要があります。ぜひみなさまのお力をお貸し頂ければ幸いです。

さて、この高大接続研究センター紀要第5号には、通常の業務報告の他、2つの原稿を掲載しています。ひとつは大谷先生によるアメリカの戦略的エンrollment・マネジメント・カンファレンスへの参加報告で、このカンファレンスについてだけでなく、戦略的エンrollment・マネジメントの現状についても解説がなされています。米国の大学の、多様で質の高い入学者の獲得と入学した学生の在籍維持と学業達成のための戦略の一端を知ることができ、日本の大学の努力の余地はまだまだであると痛感します。

もうひとつは、当センター研究員で、非常に早くから高大接続改革の研究に取り組んで来られ『大学入試の終焉：高大接続テストによる再生』（北海道大学出版会 2012）の著者でもいらっしゃる北海道大学名誉教授の佐々木隆生先生の論考「主体的学習をめぐって」です。「主体的学習」は高大接続改革の中心的な概念の一つですが、そのことば自体が一人歩きしていますし、アクティブ・ラーニングなどと一緒に形式的にのみ論じられることが多く、それが本来どのようなものであり、どのようなものであるべきかについての検討は十分ではなかったように思います。佐々木先生の論考は、アリストテレスなどの古典に遡って主体的学習の意味を掘り下げながら、学生が主体的学習者となる大学教育を実現するためにデータをを用いた検討が展開されているもので、ぜひお読み頂きたいと考えます。

なお、2019年冬から現在に至る新型コロナウイルス感染症の拡大によって、全国の小・中・高等学校と特別支援学校に休校が要請されるなど、教育現場と児童・生徒、その保護者、また学校給食などに関わる事業者は前例のない経験をしています。くわえて既に、4月からの授業開始の延期を発表した大学も出ています。このことは高大接続という観点からも大きな影響を有することになると思われませんが、事態を見守りながら、高大接続について、さまざまな点でいっそう貢献できるセンターとして発展させていきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

高大接続研究センター長 教育発達科学研究科副研究科長・教授 柴田 好章